

## 大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ

大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレは、十日町、津南町の 760 平方キロメートルを舞台に、3 年に一度開催される野外アートフェスティバルである。2000 年に始まって以来、世界最大級の野外アートフェスティバルとなり、新潟の雪国を現代アートのダイナミックな中心地にしてきた。

このフェスティバルはもともと地方活性化のために企画された。1950 年代以降、全国的に都市化が進み、十日町のような地方では人口の減少と高齢化が進んだ。トリエンナーレは、アート、エコロジー、コミュニティの接点を探ることで、新しい地域のアイデンティティを形成することを目的としており、アートを美術館の外に持ち出し、公共空間に持ち込む試みでもあった。このフェスティバルは、自然界と共存する伝統的な集落である山里の生活の魅力と品格を、住民や観光客に再認識させるものであった。

自然との調和をテーマに、サイトスペシフィック・アート・インスタレーションは、風景の一部となるように作られている。田んぼや路地、民家や空き家の外、公園や庭の中を曲がりくねって出現し、地域のタペストリーの一部として溶け込んでいる。作品の中には機能的で、ベンチや遊び場、物置の役割を果たしているものもある。また、自然や農業、文化的伝統を強調するものもある。

現代アートと伝統的な村の暮らしは、一見相容れないもののように思えるかもしれないが、両者の根底にはコラボレーションの精神がある。このことは、このフェスティバルの最初の作品のひとつに示されている。ロシア人アーティスト、イリヤ・カバコフとエミリア・カバコフによる「田んぼ」だ。伝統的な切り絵のような形をした細い人物が棚田に立ち、耕し、種をまき、田植えをし、草刈りをし、稲刈りをするという稲作の困難な作業にあっている。この土地の高齢の所有者は当初、長く苦労して耕作された水田を先祖の忍耐の象徴と見て、このプロジェクトに貸すことをためらっていた。しかし、アーティストたちとの話し合いの中で、彼は水田を耕し続けることがコンセプトの一部であることに気づいた。アート作品の一部として、この土地は彼の引退後も、フェスティバルのボランティアの助けによって耕作され続けるのだ。さらに、このアートインスタレーションは、雪国に住む人々の生存において、共有労働がいかに中心的であったかを伝えている。現在も、この地を訪れる人々を住民がお茶とおにぎりで出迎え、住民と訪問者のコミュニケーションと相互理解を育んでいる。

トリエンナーレが始まって以来、クリスチャン・ポルトンスキー、マリーナ・アブラモヴィッチ、蔡國強、ジェームズ・タレルなど、世界中から約 1000 人以上の著名なアーティストや建築家が参加している。現在、200 を超える常設インスタレーションが田園地帯に点在し、年間を通して来場者を魅了している。映画祭期間中には、さらに仮設作品が設置され、50 万人の観客がそれを見るために新潟の山々を訪れる。